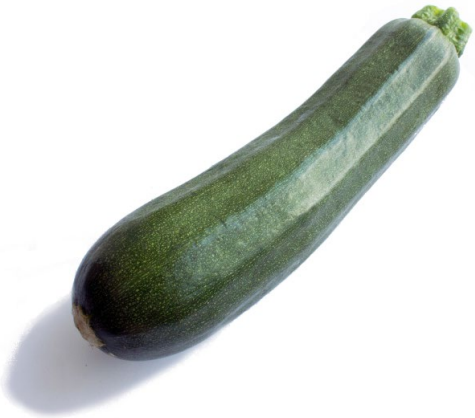
展景

季刊

No.98



Summer 2020

季刊　展景98号

目次

ベレー帽〈短歌〉……布宮慈子　4
芽吹く里山〈短歌〉……市川茂子　6
チューリップ〈短歌〉……小野澤繁雄　8
放置自転車〈短歌〉……河村郁子　10
蝶の昼〈俳句〉……新野祐子　12
東京歌会（第八十八回）……　14
〈那須通信 43〉温室……加藤文子　16
〈薫風颯々 18〉北前船がもたらしたもの……神村ふじを　20
対詠　ごきげんいかが？　PART 74……小野澤／布宮／河村　26
前号作品短評A……　28
前号作品短評B……　30
エッセイ教室「清紫会」の作品より
　靴の話……松井淑子　32
「清紫会」だより……　35
無二の会短信……　36
編集後記……　40

今号のイメージ／ズッキーニ

ベレー帽

布宮慈子（やすこ）

始まりは演奏会に行くときの帽子つくらむと思ひしことなり

生地を買ふために見てゐるインターネット手触りなければ注文はエイッと

ネットにて生地を取り寄せ挑みたり四枚はぎのベレー帽に

モスグリーンのベレー帽がやうやくに出来あがりたりなかなかである

山形交響楽団（やまぎやう）の演奏会は中止にてネット配信を家で見てをり

家の中で帽子かぶつて山響の演奏聴きぬマスクはせずに

なぜなのかネット配信の演奏に涙にじみ来（く）　日常は遠し

フェルト帽の季節はとうに過ぎゆきてモスグリーンのベレー箱に仕舞はる

フェルト帽かぶつて行くこと叶ふのか秋の演奏会を誰も知らない

縫ふことは祈りに似たりミシン踏むたびにことばが生まれては消ゆ

芽吹く里山

市川茂子

風はやも春の気配にかわりつつ街の彼方に夕焼赤し

帰るなき生(あ)れし地なれどはるかにて芽吹く里山夢に出でくる

年古りて昨日のごとくに浮かびきて幼に還る四季の里山

災害に登山電車は横たわり箱根路の旅バスにて巡る

との曇る早春の山かすかにも芽吹きのきざし風の音きく

山峡にせせらぎの音聞こえきて覗く水面に鴫(しぎ)一羽立つ

大輪に白の色さす八重椿　鉢より出でて地に一つ咲く

街路樹の根元うずめてとりどりにつつじ咲きつぐ街の静もり

総会の議案書とどき「コロナ」にて委任状一通送りて終る

ウイルスの感染気にし帰り来て空気清浄機のスイッチを押す

チューリップ

小野澤繁雄

水かえをするのみなれどチューリップ室に花あることのうれしさ

チューリップでまだあるようないただきしそれも稀なる花を室置き

遠い大地をながれるような何か声唐が起源の二胡に馬さんは

まだよくなるという曲「紅い花」山西省では牡丹のことと

上京のその日に遠く春の日に緊張もなく向かう東京

展望ラウンジは人が多くてみるはそら下に小さくクレーンまた人

ふるさとのまだ県内に雨上がり虹が出てきた薄く小さし

母の家の片づけごとにきているに何のはずみか学帽飾る

小学校はおおごえどおりを通りすぐ小声よりよきものかおおごえ

一時間は早いという下校雨のなか傘があばれて一年生ら

放置自転車

河村郁子

春浅き朝の寝ぼけまなこにて新聞受けまでスロープ下る

怪訝なる思ひのうちに見つけしは塀に凭せかけたる自転車

黒一色一直線のハンドルに細輪のタイヤのスポーツタイプ

最寄りなる駅のあたりで盗られしとS警察署へまづ報せたり

放置場所は所轄に非ずと断られH警察署へ報告なしぬ

ほぼ二時間後警官二人が取り調べ「登録番号の被害届が出ていません」

区役所の電話番号教へられ詳細語れば「担当は支所…」

支所にても状況話せば「引き取りは問合せセンターに依頼せよ」

センターに五回目の現状伝へ「通知済」の貼り紙せよと命ぜらる

雨に濡れ雪にも降られて六日後に撤去されたり　誰知らぬ間に

蝶の昼

新野祐子（にいの）

『一日一文』ロレンスの詩と青き踏む

永久凍土解けモンスター陸続と

魔除けとう満作咲かずパンデミック

春愁い完膚なきまで払われて

師・H画伯

春光や亡き子を描く絵に楽譜

葉山山行三句

コロナ禍や残雪の白きわ立てり

目印を辿れば奈落蝶の昼

いま芽吹く撫はますらお触れてみる

届きたるコゴミ・アズキナ・オプチミズム

あめつちにひろごるしじま鳥帰る

東京歌会（第八十八回）

二〇二〇年二月二十日(木)、会場・文京区立アカデミー向丘二階和室。詠草は各二首八首。出席者三名(小野澤繁雄、林博子、松井淑子)。

路地に入り角を曲ればひともとの紅梅ほころび闇にただよう　　市川茂子

いつものというほどの路地。夕ぐれだろうか。紅梅は既知。帰宅の路地、夜でもあることが一首目にある。四句八音。(紅梅)ほころび闇にただよう、のは開花し、その香りがというようなことか。闇にただよう、がいいという。

すがすがとメタセコイアは天に伸び忖度など無き直ぐなる形象(かたち)　　林　博子

忖度などなき、を、直ぐなる、につなげている。忖度など無き、は今の時代性でもある。直ぐなる、と単純化して云った。メタセコイアの和名はアケボノスギ(曙杉)。北半球で化石として知られていたが、中国奥地で原生種が発見されて以来世界各地で栽培されているという(『新明解国語辞典』第五版)。メタセコイアがいろいろ話題になった。すがすがと、は清々と。三句で、天に伸ぶ、と切ってもいい。

演奏会の果てて若き歌手言へり「なま暖かく見守つてください」　　布宮慈子

ここで、なま暖かく、に作者は戸惑っている。この言い方はどう流通しているのか。こういうことでいいのか。ここでは、若き(歌手)がかなめ。面白がっていない。

水やりをしているだけと云う女性(ひと)の庭に一つまた花の名を聞く　　小野澤繁雄

庭でいろいろ草木の世話をしている女性。水やりをしているだけ、は謙遜か。その人に花の名を聞いたことがある。きょうまた花が眼に止まり、その花の名を聞いている。わかりやすいやりとりがある。

(報告：小野澤繁雄)

〈那須通信43〉

温室

加藤文子

さいたま市から冬の厳しい那須に移住するにあたって、盆栽の温室が必要になった。さいたまでは冬のあいだだけ、パイプを組んで簡易のビニールハウスを設置していた。庭が狭かったため、あらかじめ盆栽を移動させて棚を外しておかないと作業にのぞめない。たったひとつのビニールハウスなのだが、あれこれ準備が要った。

設営後ハウスの中に棚を用意して、盆栽の配置を考えながら納めて終了となる。

早朝からはじめても、まる一日かかる。前日から部材を揃えたり、段取りするので、予報が外れて当日雨になっても決行した。

春になれば解体して元の庭に戻す。出したり入れたり、作ったり解体したり、季節のたび十年のあいだおこなっていた。

温室ができればこうした作業はしないですむようになる。

参考に集めた建築雑誌に多様に工夫されたヨーロッパの温室、その生活を愉しむ人々の様子が紹介されていた。そんな情景にあこがれを抱いた。

どの程度の温室をつくったら良いのか迷っていたら、建築家のNさんがアドヴァイスを下さった。

結局、霜で持ち上がらないよう基礎を深く掘り、鉄骨を柱にアルミサッシを組み込んだしっかりした構造のものをつくることにした。

たくさんの盆栽を収容するには二十坪以上の広さが必要だった。住まいの敷地より広いばかりでなく、費用も嵩む。私たちにとっては思いきった決断になった。

十二月、雪の降りしきるなか引っ越した。すでに温室が完成していたので、難なく盆栽を保護することがきた。移住初日から温室の必要性を認識させられた。

隅を仕切って作業場をつくり、憩えるようにイスとテーブルも置いた。鉄の柱にはピンク、ウルトラマリーン、白、黄色、いろいろな色でペイントした。窓ガラスの一部に白いペンキを塗って、アクセントをつけてみた。色を施しただけで、金属の箱のような印象がやわらいだ。

厳しい寒さや雪ばかりではない。春の嵐、台風、天井に遮光シートを渡してあるので夏の日ざしにも温室は対応してくれる。

天候に左右されずに仕事したり、談話もできる。

窓から吹き抜けるやさしい風を感じる時の心地良さ。窓を開けた瞬間、輝きに満ちた盆栽たちに出あう朝。夕やみの迫る間合いに金色に燃えるシーンも……。

温室に通う日々から、温室のある風景から数知れないよろこびや愉しみを受け取っている。年追うごとに裕(ゆた)かなものになっている。

所々ペイントした温室の情景　　撮影：加藤文子

〈薫風颯々18〉

北前船がもたらしたもの

神村ふじを

もう3年ほど前になるだろうか、家内が吊し雛を見たいというので酒田に出掛けたことがあった。山形県は大きく内陸と庄内に分かれていて、内陸に住んでいる身にとっては、内陸地方は山、庄内地方は海であり、地理的な環境も言葉も文化もまるで違う。だから、内陸で吊し雛にお目にかかったことはないし、庄内人は活きのいい魚が食べられて幸せだなどと、知らず知らず隣の芝生的見方が身に付いてしまっている。

何でも日本三大吊し飾りと言われているものがあって、それは福岡柳川のさげもん、伊豆稲取の雛の吊し飾り、そして酒田の傘福だそうで、中でも酒田の傘福は大人気なのだそうだ。

酒田を代表する料亭山王くらぶで展示される傘福は、「湊町酒田の傘福」とわざわざ「みなとまち」を強調して行われている。

１７６５（明和２）年、本間家３代当主光丘（みつおか）が祇園祭の山鉾（やまぼこ）に似せて京都の人形師に２７０両の大金を掛けて作らせたという亀傘鉾が、この傘福の元になっていると言われている。

傘福展示の会場になった山王くらぶは国の登録有形文化財。１８９５（明治28）年の建築というから築１２５年の重厚な造り。元々は宇八楼と呼ばれ、同じ日吉町にある相馬樓と並んで酒田の料亭文化を今に伝えている。

１６７２（寛文12）年、江戸の政商河村瑞賢によって日本海から下関、瀬戸内海を通る西廻り航路が確立され、酒田から上方（大坂、京都）、江戸への安全な航行が可能になった。

意図的に安全と書いたのは、米沢藩では江戸への廻米（かいまい）はそれまで陸送で峠を越えて阿武隈川へ至り、船で下して宮城県亘理町の荒浜から銚子へ、川船に積み換えて江戸へ運ぶか房総半島を遠巻きにして伊豆下田へ至り、下田から西南風を待って江戸へ運ぶという方法が取られていたが、犬吠埼沖は大変な危険水域であったため、安全な西廻り航路の確立に期待を寄せていたという理由からである。

１６９２（元禄５）年、米沢藩の御用商人西村久左衛門は、１万７０００両という大枚をはたいて、難所として知られる白鷹町の黒滝から始まる五百川（いもがわ）峡谷を切り開き、左沢（あてらざわ）までの舟運を確立。左沢から大石田、酒田への航路はすでに開かれていたため、これによって米沢から江戸への廻米が安全確実に行われることになった。

酒田は、「西の堺、東の酒田」と称され、米の積み出し港として隆盛を極めた。時代は違うが、

12棟の「山居倉庫」はその庄内の米文化を今に留める蔵であると言えるだろう。
やさしくあたたか味のある傘福を堪能したあとは、老舗料亭香梅咲で昼食となった。酒田舞娘の華やかな踊り付きの食事であった。
そこで披露された酒田甚句に驚いた。筆者の地元左沢に伝わる百目木甚句とほぼ同じに聞こえるのである。歌詞はもちろん違うが、明らかに百目木甚句は酒田甚句を元歌にしていることは素人の耳にも明らかだった。酒田甚句の歌詞はこうである。
「日和山　沖に飛島朝日に白帆　月も浮かるる最上川　船はどんどんえらい景気　今町舟　場町興屋の浜　毎晩お客はどんどんシャンシャン シャン酒田はよい港　繁盛じゃおまへんか」
百目木甚句は、
「左沢　お米山と積んで帆を巻きあげて　今日も下るぞ酒田舟　いつごろお帰り風次第　荷物は何々　松前の　にしん　こんぶに　たら　かすべ　京の友禅　博多帯　おみやげ話は　たんとたんと」
酒田甚句の「おまへんか」も面白いし、百目木甚句の「松前」「京友禅」「博多帯」も面白い。まさに舟運がもたらした文化が散りばめられている。
紙面なので音としてお伝えできないのが残念だが、メロディーといい歌詞の構成といい、まったくもってルーツは同じであると感じたところである。

最上川で運ばれた物は城米、蔵米をはじめ米が圧倒的に多かったが、紅花や青苧も多く運ばれた。
青苧はカラムシとも呼ばれ、野山に生えるイラクサ科の多年草だが、武士の裃や富裕層の単衣などを織る際の材料として高値で取り引きされた。奈良晒や小千谷縮はこの青苧の糸を原料に作られている。
山形県内では、置賜地方や村山地方などで主に栽培されており、大江町七軒産は最上青苧の中でも七軒苧と称され高級良質青苧の代名詞でもあった。
七軒地区の中にある大江町大字小清字十郎畑の旧家斎藤半助家は、加賀屋の屋号で江戸末期に畿内へ特産品の青苧等を販売した。最上川に3隻の船を持ち、左沢に店を2軒構えた。
明治20年代まで盛んだった青苧栽培は、北陸地方の青苧織物業の衰退によって需要がなくなり明治30年代に入って激減していった。それに代わって養蚕業が生業の主体となっていった。
大江町大字小清字田代。前述した十郎畑の隣村である。炭焼きや青苧引き（青苧から糸を引く作業）で真っ黒になった村の人々。その村人達が何よりも楽しみにしている連歌の会があった。そのときの様子が結城登美雄氏の聴き取った話として「地元学からの出発」に載せてあった。
「その日は昼までに仕事を切り上げ、昼風呂をわかしてさっぱりして、男は紋付き、女は羽織に着替えて、村人全員、小さな神社に集まる。狭い境内にムシロを敷いて、車座になって句会が始ま

る。…（略）…みんな荒れた武骨な手に紙と筆をもち、座主が出す『清々と』という上の句をうけて、下の句を考える。ややしばらくして、しわくちゃばあさんが、『稲の穂の出る盆の月』とかえす。…（略）…『春過ぎて』とくれば、白髪頭のじいさんが、『夏の浴衣を縫う娘』とまじめな顔で読みあげる。一座の目が、その色っぽい下の句に、ほぉーっと声をあげて、あらためてじいさんの顔を見る。照れたじいさんが下を向いて酒をのむ。……」（原文ママ）

何ともいい光景ではないか。調べてみたら、十郎畑の熊野山神社にも慶応年間に奉納された連歌額が掛けられており、左沢から西へ20㎞ほど離れた山村の七軒地区全体が、青苧の生産、販売の収益によって一定の安定的な暮らしがもたらされていたことが容易に分かる。最上川舟運を介してこのような上方の文化が山村にずっと息づいてきたことに驚かされる。こんな山の中の10戸足らずの集落に、このような素晴らしい文化が……。

十郎畑も田代も高度経済成長の流れには勝てず、町内にあるいは近隣の市町に挙家離村*し、昭和51年頃には村は消滅してしまったが、今この時代にあって、便利さや経済的豊かさ、あるいは教育のあり方等、マイナーなものにこそあるメリットよりもメジャーメリットばかり追い求めてきた私たちは、僻村や山間部で暮らすことの意味や真の豊かさとは何かという問いを投げ掛けられている。

＊一家全体で集落を離れ、移転すること

参考文献：「大江町史近現代編」（２０２０年5月、大江町教育委員会）
「大江町と最上川の流通・往来の景観保存調査報告書」（２０１４年3月、大江町教育委員会）
結城登美雄『地元学からの出発』（２００９年11月、農山漁村文化協会）
大江町誕生60周年記念誌「ふるさと発見 大江」（２０２０年2月、大江町教育委員会、農山漁村文化協会）

対詠　ごきげんいかが？　PART 74　〈2020〉

小野澤繁雄　O
布宮　慈子　N
河村　郁子　K

緑茶にはカテキンがありカレーにはターメリックありと抗ウイルス検索　3月14日　K

急須で淹れたお茶を飲むのは朝だけとこれは兄さんわが家も同じ　3月15日　O

Twitterにチャイコンとありチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲ぞ　3月19日　N

百歳の媼言ひけり「戒厳令」　今年の花見はスーパー道中　3月23日　K

確かめんとしてそのひとつ育心会の桜もみおり近所の桜　3月25日　O

桜咲く季節なれども出できたる晒し木綿にマスク縫ひをり　3月31日　N

いざなはれ訪(と)ひたる桜の名所にはドローンが巡る映像花見　4月4日　K

一部開館窓口のみの図書館に児童書ならぬ「レ・ミゼラブル」求む　4月6日　O

今にして売れてゐるとふアルベール・カミュの「ペスト」さくら満開　4月14日　N

通学の都電に揺られ読みたる『ペスト』その不条理が身に迫りくる　4月17日　K

この休み川にきている人多く三密さけて密は黄の花　4月20日　O

ゴールデンウイークといへど食卓に甘夏みかん光るのみにて　4月29日　N

自粛なら終活読書庭仕事と目論見たれど鉄線咲くのみ　5月2日　K

風吹いてからだのなかが風になる大鯉ゆたか五月のそらに　5月10日　O

新緑の葉はてらてらと光れども五月の空に鯉のぼりゐず　5月17日　N

早朝の光を受ける若楓　巣籠もるわれを励ますらしも　5月30日　K

門入りてすぐもどりくる中学生ら校舎外にて何か受取り　6月1日　O

やうやくに集団登校する子らの声はづみたりマスクをつけて　6月10日　N

「気をつけてね」授業は時差の女の子一人で登校一人で帰る　6月19日　K

前号作品短評A〈小野澤〉

●クリスマス形見のような『クオレ』繰る　　新野祐子

（原題Cuore「心」の意）児童文学書。デ＝アミーチス作。一八八六年発表。邦訳題名「愛の学校」。エンリコ少年の学校や家庭での日常生活を通して人間愛、祖国愛の美しさをうたいあげた（以上、精選版『日本国語大辞典』）。この作品から何を読み取ったらよいのか、は人によるかもしれない。善意、勇気、労働などの尊さだろうか。繰る、はページを繰る。だれの形見か。前三句からはお父さんだろう。作品中でも、お父さん、お母さんの存在は大きい。形見のような、に微妙なものがある。父の形見の、としたときとどう違うだろう。カタカナの「クオレ」はクリスマスと同質な舞台になっている。

二句、五句、六句目で中村哲氏に触れ、横たう水路（六句目）も、そう読むことができる。

あの世より雪降らぬ里憂うかな

憂うのはお父さんだろう。里は、故里でもある。今冬は雪が少なかったようだ。

●ひそやかにトトロの帽子と名づけたる大きい二本の木がなくなりぬ　　布宮慈子

これもまた在所の歌。といってものびやかでふっくらとした語り口には、少し弾んだ調子がある。トトロの帽子があり、大きなでなく、大きい、なくなりぬ、といったところがそう読ませるようだ。

帽子に限らず、トトロにはベビーグッズが多い（トトロの帽子手編みもウェブ検索では候補語になっていた）。この歌では大きい二本の木、また、木は檜葉だったらうか、その木、牡丹（落葉小低木）、松の木、松、松の木、大木の松、とこの一連では身近な木が多く詠われた。人（ヤマさん）との関わりも牡丹の記憶とともにある、羽州街道を見続けてきたはず、という大木（松）の記憶もある。その木を記憶することでもある。

大木は羽州街道を見続けてきたはず松の記憶は永遠

雪少な雪少なとてたまに降る雪はうつくしすべてを覆ふ

記憶が覆うものもすべてなのだとおもう。

●校庭の古(ふ)りし囲いの山茶花は取り払われて高き塀立つ　　市川茂子

学校、とくに身近な小中学校となると、何か囲いがあるだろう。市中であってはそれがコンクリということもある。全体でなくとも、生垣となっていたところがあったかもしれない。それが、この歌では山茶花で、もう長い経過がある。取り払われたことで、改めて気付く。こういうことはある。近所の小中学校では、フェンスのところもあり、そのフェンスも高さがある。校庭の出入りも管理されていて、昔とは違っている。いろいろあって、今がある。ひとつの経過感だが、直接に云ってはいないが、さびしいものだ。

東京の桜開花の標本木老木ながら境内にあり

寺社の境内はだいたいのところ開放されている。桜開花は東京が割合早く、その標本木もしられているが、老木ながら、というところに作者の注目がある。古りし、と同じように、経過感が作者にはあるようだ。境内は一種の公共空間。ひとつの共感がある。

前号作品短評B〈慈子〉

●モミジにも種類はあれどことごとく言葉によりて秋化粧まで　小野澤繁雄

モミジについて調べてみると次のような解説があった。「一般にカエデと呼ばれている樹木は、カエデ科カエデ属の、主として北半球の温帯に分布している150種を総称したものです。特に、東アジアを中心に日本に約20種、中国に約30種が分布し、北アメリカ、ヨーロッパにまで広がっています。（中略）園芸品種が多く、特にイロハモミジ（イロハカエデともいう。Acer palmatum）、ハウチワカエデ（Acer japonicum）など、日本産の種に属する品種が200～400品種といわれています。園芸の世界では、切れ込みが深く数が多いものをモミジ、浅く少ないものをカエデと呼んでいます」（「みんなの園芸」ＮＨＫ出版）。じつに多くの種類があり、秋の代名詞のようなモミジ。そのいずれにも名前が付き分類されている様子を驚きをもって眺めているようだ。

みちのはば隔ててここにすれ違うかすかながらに少女はうたう

散歩の途中だろうか。すれ違うまで少女が歌っている声は聞こえなかった。歩いて近づいていくと「かすかながらに」歌っていることに気がつく。一瞬の出来事が一首となった。何かいいことに出合ったような、ふわりとした感覚が残る。

●とりたてて不具合なけれど買ひ換へる年末商戦の「パソコン一式」　河村郁子

「新しいパソコン」と題する一連。パソコンとはたいへん便利なものだが、絶えずアップデートやら何やら、買って終わりというわけにはいかない。しかし、作者には常に新しいものに挑戦する気持ちがある。それは素晴らしいことだ。

ディスプレイ一行のみのワープロに漢字の変換初めてなせり

タイプライターからワープロへ、そしてパソコンへと、世の中の文章作成技術は大きく変わってきた。とりわけパソコンは一台で何でもできるものとして、今や手放せないものとなっている。ワープロへの最初の入力の「時」を切り取った一首である。ごく初期のワープロを経験した者にとって、この歌はたいそう感慨深いものであるはずだ。

●よき香放つ枯葉の山に潜る子等　谷垣滿壽子

秋の晴れた日、近所の子どもたちが枯葉の山につぎつぎと飛び込む。その様子が見えるようである。あとで焼き芋をすれば完璧だ。最近、こういった子どもはあまり見かけない。だから一層惹かれるのかもしれない。

積雪は如何ばかりかと雪女郎

物語性の強い句である。いよいよ寒くなる冬の入り口に、ことしの雪はどんな具合かと思う。そこに雪女郎を立たせる不気味さ。しかし結果は、雪国といわれる地方でさえほとんど雪のない冬であった。雪女郎はどんな思いでいたことであろう。

エッセイ教室「清紫会」の作品より

靴の話

松井淑子

しばらく前、かかりつけの内科医院で診療をしてもらい、薬の処方箋をもらって帰ろうとしたら、玄関先に私の靴が見当たらない。その日、私は午前中最後の患者だったから、残っているのは私の靴だけのはずである。

私の靴は紐(ひも)つきの黒いスニーカーで、脱ぎ履きが楽なように紐のそばにファスナーがついており、これが気に入って愛用しているものだ。ところが残っているのは、やはり紐つきの黒いスニーカーだがファスナーがついておらず、それに私のものよりやや大きい。

困って看護師さんに相談すると、看護師さんは驚いて、私の前に帰っていった三人の女の患者さんの誰かが間違ったのだろうから、電話して調べてみましょう、と言ってくれた。

窓口の向こうで、あっちこっちに電話をかける声が聞こえてくる。だが、相手はまだ家に帰り着いていなかったり、連絡がついても、「靴はまちがっていない」と言われたりで、結局分からずじまいのようである。

先生まで出てこられて心配してくださる。先生は若い女医さんで、ご自分の靴を出してきて、

「私は夕方、診察が終わるまでは履かないから、もし足に合うならこの靴を履いて帰って、お宅でご自分の靴に履きかえて、私の靴は夕方までに返してくれる、というのではどうでしょう」

と言われる。

結局、その靴を借りて帰ることにした。かかとの低い黒のパンプス型の靴で、若い人のものらしく可愛らしいピンクの飾りがついている。多少、気恥ずかしい思いをしながらもその靴を借り、まず薬局にいって薬をもらい、ついでにスーパーマーケットに寄ってあれこれ買い物をする。

家に帰り着いたら電話のベルが鳴った。急いで受話器を取ると、内科医院の看護師さんからである。

「あのねえ、靴を間違えて履いていった方が返しにみえましたよ」

と言う。周りでケラケラと笑う声が聞こえてくる。「それがねえ」と、看護師さんも笑い声で続ける。

「男の人なんですよ」

私はあきれてしまった。私はからだの割に足が小さい、とよく言われる。その小さめな足用の靴が履ける男性とはいったいどんな人だろう。ともかく先生から借りた靴を返しかたがた、自分の靴

を受け取りに再び内科医院に向かった。返しにきた男性はいなかった。

つい先日のことである。またその内科医院にいくと、玄関で若い男性とすれ違った。ジーパンにジャンパーというラフな恰好（かっこう）の若い男性である。ずいぶん小柄な人だな、と思いながら窓口にいくと、看護師さんが、

「あの人ですよ。靴を間違えたのは」

と、小さな声でそっと教えてくれた。

「清紫会」だより

◆第188回　二〇二〇年二月二十日（木）、会場・文京区立アカデミー向丘二階和室

〈提出作品〉林博子・泡セッケン／松井淑子・靴の話

◆第189回と第190回の集会は新型コロナウイルスの影響で中止。

無二の会短信

◆コロナウイルスの感染が拡大しているなか、あちらこちらで地震があって、日本列島がどうなっているのかと叫びたくなる。近年はあまり出歩くこともなく、いつものスーパーや近くの商店街に行って食べ物を買い足すぐらいなのに、外出しないように言われると、お花見や新緑の自然を散策したくなってしまう。が、一歩外に出るとウイルスが飛び散っているような気がするので、一日も早く終息して普通の生活になることを願いながら、静かに待っている。

市川茂子

◆ひと月以上架かっていた足場ですが、昨日やっとベランダ側が撤去され、そうなると、住まい四階のベランダにすぐ空なので、何か不安感があります。元にもどっただけなのに、足場で守られていたような。台風の風で一部の棟の屋根が飛んだことから、全棟で屋根の葺きなおし工事が行われ、その足場でした。昨日は緊急事態が全国で解除され、何度も返却期限が延長された「レ・ミゼラブル」も、窓口が再開され、返却できました。

小野澤繁雄

◆テレビもラジオも新聞も毎日毎日コロナコロナである。いい加減うんざりしているが、こと命に関わることなので、とにかく3密を避けて感染しないように自分を守らないといけない。マスクは冬の季語なのに、夏の入りがけなのに、町中マスクであふれている。実に異様な光景なのだが、みんながそうなので異様とは感じられなくなった。考えてみればそれもまた恐ろしいことである。

神村ふじを

◆世はまさに緊急事態、自粛の日々ですが、「暇」とは限りません。二階にいる亡姉の夫（九十五歳）を、仕事を持つ姪と介助しています。一四段の階段を一日に数回往復して運動量は確保していますが、この機にと構えた私の終活や読書が滞っています。

河村郁子

◆「新型コロナは枕詞のようになったな」などと呑気なことを言っていたら、対岸の火事ではなくなって来た。治療薬のない疫病が猛烈な勢いで世界中にはびこるとは誰が予想しただろう。アジアやアフリカではＨＩＶ、マラリア、結核で毎日七千人が命を落としているという。新型コロナはこれに拍車をかけるだろう。深刻だ。が、私は畑を耕し、ジャガイモ、ネギを植え、ニンジンの種を蒔くという、いつもの春の仕事に専念するしかないなと思っている。一日も早い終息を願って。

新野祐子

◆会員の皆さんの多くも経験されたことと思うが、新型コロナウイルスの感染防止のため不要不急の外出は控えるように、という政府からのお達しがあった翌日だったか、スーパーマーケットに買い物にいって驚いてしまった。多くの食品の棚ががらがらなのである。現在はかなり元通りに近いが、それでもレトルト食品、インスタント食品、袋菓子の棚は相変わらず品薄である。なぜだろうと不思議に思っている。

松井淑子

◆「世の中にはおかしな人もいる」――そう誰もが目を伏せながら口にすることを幼いころから聞きかじってはいたし、頭では理解しているつもりだった。ただ、私は「おかしな人」が自分のすぐ近くに存在するとは思いが及ばなかった。昨年入社してきた男性スタッフは、おかしな人だったのだ。私に対して明らかな悪意を示し、暴言を怒鳴り散らす。しかも、その悪意を明らかに楽しんでいるから質が悪い。私はついにメンタルクリニックの扉を叩いた。自分の中にある強いと思っていた何かが崩れ、人間不信の一歩手前をヨタヨタと歩いている。崖っぷちだ。負けてたまるか、と思う気持ちに身体が追い付かず、力が入らない。時間が解決してくれると信じている。良くなったり悪くなったりしながら、きっと、以前のような自分を取り戻せると信じている。

山内裕子

編集後記

◆新型コロナウイルスによる自粛で誰しも調子が上がらない時期だったと思うが、原稿はそれなりに集まった。ありがたい。しかし、けがをした人や具合がわるくなって入院した人がいて、全体としては作品が減ってしまった。かく言う自分もステイホーム（家にいなさい）を忠実に守った結果、作品ができなくなった。これからは前と同様の生活に戻るわけではないにしても、会員それぞれがウォーミングアップしながら短歌や俳句作品、エッセイに取り組んでほしいと思っている。

新型コロナについて日本がさも成功したような報道があるが、「口角泡を飛ばす」ような議論を日本ではしないし、なにより日本人は家でも「しゃべらない」ことが原因ではないか。少なくとも、わが家ではそう結論づけている。みなさんは、どう考えますか。

◆何年ぶりかでミシンをかけたら、すっかりハマってしまった。市中の店という店からマスクが消えたころ、それなら布のマスクを作ってみようかと思ったのだ。さいわい母が遺した晒し木綿があった。作り方をインターネットで調べてみると、あるわあるわ。プリーツを入れたマスクやら立体マスクやら、いくらでも出てくる。それも動画でていねいに教えてくれる。そうして布マスクを作っているうちに、ミシンをかけるのがやたら楽しくなった。ミシンをいつも出しておけるように机を設けたことも大きい。母のタンスにあった着物をほどいてエプロンを縫ったり、余り布でミニ腕カバーを作ったり。超シンプルなパジャマも縫ってみた。朝起きた途端、作っている最中のものが頭に浮かぶ。自分にはちょっと難しい技だけれど挑戦してみるかと考える。その一つ一つが面白くて仕方がない。まるで「作りたい病」だ。型紙を起こすのも嫌いではない。むかしは服飾の学校に通うとか、先生について教わるとかしなければ習得できなかった技術が、ネットで検索するとたいてい出てくる。無料で型紙の寸法を教えてくれるサイトもある。なかには、こんなのでいいの？と思うほど雑な作り方をする人もいる。が結局は、布を切って縫って着られればいいのだと妙に納得させられたりもする。

毎日毎日、夢中で作りつづけた時期を過ぎて、いまはミシンをカタカタ動かしながら手触りのあるものを作ることをゆるやかに楽しんでいる。巣ごもりの三ヵ月で、新たな自分を発見した気分である。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 98号
二〇二〇年六月三十日　発行
編集・発行人　布宮慈子
制作　スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
info@muninokai.com

Copyright© 2020 MUNINOKAI. All rights reserved.